

65年目の夜明け

昨年11月14日から12月20日までの間、福岡市総合図書館と福岡市赤煉瓦文化館の2会場で開催された加藤介春の初の企画展。未公開のものを含む約250点の資料が展示され、彼の詩人として、記者としての生涯が紹介されました。



福岡市総合図書館 Fukuoka general library
図書や映像などの貸出のほか、館内の文学・文書課では、資料の管理や「福岡市文学館」の運営も行う。



↑「介春の詩集は、今やほとんどが絶版や希少本となっており、大変貴重な資料です」と中山さん。



↑生前編まれた詩集は5冊。今で言う「特装本」のようなきらびやかな装丁のものが多い時代に、介春の詩集にはそういった飾りがまるで無い。「詩さえ読んでもらえればよい」といった謙虚さが感じられる。

愚直に生きていた介春 ●福岡市文学館学芸員中山千枝子さん

介春の抱えている「孤独」の部分は、今を生きる我々にも共通している気がします

●不器用さが招いた不運

一般的に、詩人は時代のトレンドを取り入れながらどんどん新しい作風を手に入れていくものなんです。介春は全詩集をおして見ても、見事に変わりません。流行に自分を合わせる事ができない、不器用なところがあつたのを感じます。また周囲にアピールするタイプの人ではなかつたようで、もうちょっと自分に自信を持って自己主張してもよかつたと思うんですが、ずっと「自分なんか」って言うてるんです。そんなに卑下しなくても思っと思つちゃうほど。でも多分それが素直な気持ちだつたんでしょうね。

彼の詩が大きく評価されたのは東京にいた時代なのですが、その時代だけの詩を集めた詩集が無いんです。本当は東京で出す予定はあつたのに、なぜか結局出さじまいで。介春の詩集は、どれも作風の変化はないけれど「代表詩集」というものがあります。萩原朔太郎だつたら『月に吠える』



↑中山千枝子さん
福岡市文学館学芸員。図書館情報大学(現・筑波大学)を卒業後、筑波大学大学院に進み、前橋文学館での勤務を経て平成20年福岡市に入庁し、現職。

のような、それ一冊でその詩人が分かるという詩集が無いんです。時代の流行に乗れず、本人自身の「良く見られたい」詩集にこだわりたいという欲もないため「代表詩集」が無い。これは介春が後世に伝えられなかつた一つの要因だと思えます。

●介春の詩の魅力

介春の詩からは、やさしき、繊細さをとても感じます。目を向ける対象もすごく弱いものというか、誰しもがうたうような美しいものではなく、誰も目にとめないようなものだったり、あまり美しくない、人が好まないものに視線を寄せた作風が中心です。詩に詠まれてる汚いもの、壊れたもの……そういったものに介春は自分を仮託し気持ちを寄せています。

また介春の詩は、そこからにじみ出ている人の気持ちのような部分が普遍的なので、古さを感じません。孤独を抱えていた介春ですが、それが、今を生きる我々が持つ孤独と似て



↑中山さんが企画・編集を務めた図録「黎明の歌」。多くの詩を収録している。(お問い合わせは総合図書館 ☎092-852-0606まで)

いるんです。同じような気持ちがこの人にもあつたのになつて想像すると、すごく近い気がしますね。

●黎明の歌

企画展のタイトルは本人の最後の詩集「黎明の歌」から拝借したのですが、介春がこの詩集を出したのは昭和18年。この時介春は火野葦平に「多分この詩集が自分の最後の詩集になると思う」と言っています。健康状態や戦争事情を考へてのことだと思えますが、この詩集が最後になる意識がありながら、その最後の詩集に「黎明(夜明け)」という言葉をあてているんですね。その本人の気持ちを考へた時に、今回の企画展のタイトルにしよつと決めました。

不器用さと不運が絡み合い、歴史の狭間にスポットと落ちてしまった加藤介春。その暗闇の中から引き上げ、企画展によつて多くの人にこの詩人と出会つてもらふことが、介春の夜明けにつながると思つています。

「加藤介春」再評価へのうごき

昭和5年、新潮社から「現代詩人全集」が刊行されました。この全集は、島崎藤村、蒲原有明、高村光太郎、山村暮鳥、北原白秋、石川啄木、萩原朔太郎など、現代の国語の教科書にも必ずその作品が掲載されているような、明治・大正期の有名な33人の作品を集めたもので、介春もこの中の一人でした。介春は昭和初期までの口語自由詩の先駆者としての活躍が高く評価され、詩壇の中でも不動の地位を保有していたのです。

しかし没後、介春への評価は格段に低くなってしまひ、その後の詩人全集や研究書で何度か取り上げられてはいるものの、さまざまな要因によつて正當な評価を得られず、介春の名は時代の流れと共に忘れ去られようとしていました。

そんな中、「福岡市文学館」主催による企画展のスポットが加藤介春に当てられました。この企画展の開催にあたり、介春自筆の原稿や手紙など散逸していた資料が発見され、地元郷土史家の間でも再び注目されつつあります。没後65年目を迎えた今、介春が「福智町出身の偉人」として名を馳せる日は、そう遠くはないかもしれません。